

序

本研究所は、昭和48年度も恒例の事業として教育論文集の刊行を企画し、論説の部・実践記録の部に分けて原稿募集を行いました。

論説の中では「学校とは何か。」というテーマを選びました。一般に「学校とは何か。」と言うとすぐに教育の量的なもの、あるいは広さ・範囲の問題としてとらえがちですが、むしろ教育の質的側面からこれを追求し、それに応ずる計画、運営の方向を明らかにしていくことが大切であると思われます。従って、「学校とは何か。」の問いは「教育とは何か。」の原点にさかのぼって追求すべき問題であると思います。

論説の部の応募は、わずか1編であったけれども、一女教師がこのような基本的方向に実践的立場からメスを入れていただけたことは、本当に頼もしく感じました。

実践記録の部は11編、内容的には、国語・社会・算数・理科・体育・道徳・特別活動・学級経営、その他共遊の時間等、学校教育活動のほとんど全領域にわたり、いずれも貴重なきびしい自己の実践をまとめられ、積極的に応募されたことに對し、心から敬意を表したいと思います。

教育実践こそ現場教師の生命であるとともに、教師が研究をつみ重ねることによってのみ教育はよりたしかなものとなり、力強いものとなるわけであります。「学ぶものは老いず。」のことばのように教師の若さもこの研究から生まれてくるものと思います。

「現場の校長学」の中で、佐々木益男先生は次のように述べております。

論語の中に「学びて時に之を習う亦説ばしからずや」とあるが、研究というものは聞いたり、読んだりするだけでは本当にわかったことにはならない。絶えず思索したり、きびしい実践をしているうちに身につくものである。これこそ研究に対する基本的態度を示したものであると思う。自分の教科・領域について参考書を読み、深く考え、掘り下げて絶えず工夫すること、そうして指導計画を立て、それを実際にやっていく。そして経験にもとづいて修正・工夫していく。これが現場教師の基本的研究の姿勢でなければならないと。

私たちは、ともするとマンネリ化しがちな毎日の教育実践の中で謙虚に反省してみなければならないことばではないかと思えます。

ここにまとめられた研究記録が、今後より多くの先生方の日々の教育研究の参考として役立つとともに、各学校における日々の教育実践の中に十分生かされ、本地区教育発展の一助となることを念願して序といたします。

昭和49年3月

足利市立教育研究所長 中 村 章